

六來木大 彈野 野  
也 續 爲 其 福 果 野  
國 師 忍 女 伸 楚 三  
心 之 華 于 止 夫 向

石全集  
十四卷

明

暗

上

全三十四卷 第十三回配本

昭和三十一年十一月二十七日 第一刷發行 漱石全集 第十四卷

定價 一五〇圓

著者 夏目漱石

發行者 岩波雄二郎

印刷者 山田一雄



發行所 東京千代田區 神田一ツ橋二ノ三 株式會社 岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・三水舎製本

目次

明暗

三

注解  
解説

二六三

二七五



明

暗

大正五、五、二六—五、一二、一四



明

暗

上



—  
醫者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。

「矢張穴が腸迄續いてるんでした。此前探つた時は、途中に癥痕の隆起があつたので、つい其所が行き留りだとはかり思つて、あゝ云つたんですが、今日疎通を好くする爲に、其奴をがり／＼搔き落して見ると、まだ奥があるんです」

「さうして夫が腸迄續いてるんですか」

「さうです。五分位だと思つてゐたのが約一寸程あるんです」

津田の顔には苦笑の裡に淡く盛り上げられた失望の

色が見えた。醫者は白いだぶ／＼した上着の前に兩手を組み合はせた儘、一寸首を傾けた。其様子が「御氣の毒ですが事實だから仕方がありません。醫者は自分の職業に對して虚言を吐く譯に行かないんですから」といふ意味に受取れた。

津田は無言の儘帯を締め直して、椅子の脊に投げ掛けられた袴を取り上げながら又醫者の方を向いた。

「腸迄續いてゐるとすると、癒りつこないんですか」  
「そんな事はありません」

醫者は活潑にまた無雜作に津田の言葉を否定した。併せて彼の氣分をも否定する如くに。

「たゞ今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄経つても肉の上りこはないから、今度は治療法を變へて根本的の手術を一思ひに遣るより外に仕方がありませんね」

「根本的の治療と云ふと」

「切開せつかいです。切開して穴と腸と一所にして仕舞ふんです。すると天然自然割てんねんしぜんさかれた面の兩側が癒着して來ますから、まあ本式に癒るやうになるんです」

津田は黙つて點頭うなづいた。彼の傍そばには南側の窓下に据ゑられた洋卓テーブルの上に一台の顯微鏡が載つてゐた。醫者と懇意な彼は先刻診察所へ這入つた時、物珍らしさに、それを覗かせて貰つたのである。其時八百五十倍の鏡の底に映つたものは、丸まるで圖に撮影つたやうに鮮やかに見える着色の葡萄狀の細菌であつた。

津田は袴を穿はいて仕舞つて、其洋卓の上に置いた皮の紙入を取り上げた時、不圖此細菌の事を思ひ出した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。診察所を出るべく紙入を懷に収めた彼は既に出ようとして又躊躇ちゆうじゆした。

「もし結核性のものだとすると、假令今仰しやつた様な根本的な手術をして、細い溝を全部腸の方へ切り

開いて仕舞つても癒らないんでせう」

「結核性なら駄目です。夫それから夫それへと穴を掘\*つて奥の方へ進んで行くんだから、口元丈治療したつて役にや立ちません」

津田は思はず眉を寄せた。

「私わたしのは結核性ぢやないんですか」

「いえ、結核性ぢやありません」

津田は相手の言葉にどれ程の眞實さがあるかを確かめやうとして、一寸眼を醫者の上に据ゑた。醫者は動かなかつた。

「何うしてそれが分るんですか。たゞの診断で分るんですか」

「えい。診察みた様子で分ります」

其時看護婦が津田の後に廻つた患者の名前を室へやの出口に立つて呼んだ。待ち構へてゐた其患者はすぐ津田の背後に現はれた。津田は早く退却しなければならな

くなつた。

「ぢや何時其根本的手術を遣つて頂けるでせう」

「何時でも。貴方の御都合の好い時で宜う御座んす」

津田は自分の都合を善く考へてから日取を極める事にして室外に出た。

## 二

電車に乗つた時の彼の氣分は沈んでゐた。身動きのならない程客の込み合ふ中で、彼は釣革にぶら下りながら只自分の事ばかり考へた。去年の疼痛がありくと記憶の舞台に上つた。白いベッドの上に横へられた無残な自分の姿が明かに見えた。鎖を切つて逃げる事が出来ない時に犬の出すやうな自分の唸り聲が判然聽えた。それから冷たい刃物の光と、それが互に觸れ合ふ音と、最後に突然兩方の肺臓から一度に空氣を搾り出すやうな恐ろしい力の壓迫と、壓された空氣が壓

されながらに収縮する事が出来ないために起るとしか思はれない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲つた。

彼は不愉快になつた。急に氣を換へて自分の周圍を眺めた。周圍のものは彼の存在にすら氣が付かずにみんな澄ましてゐた。彼は又考へつゞけた。

「何うしてあんな苦しい目に會つたらう」

荒川堤へ花見に行つた歸り途から何等の豫告なしに突發した當時の疼痛に就いて、彼は全くの盲目漢であつた。其原因はあらゆる想像の外にあつた。不思議といふよりも寧ろ恐ろしかつた。

「此肉體はいつ何時どんな變に會はないとも限らない。それどころか、今現に何んな變が此肉體のうちに起りつゝあるかも知れない。さうして自分は全く知らずにゐる。恐ろしい事だ」

此所迄働らいて來た彼の頭はそこで留まる事が出来なかつた。どつと後から突き落すやうな勢で、彼を前

の方に押し遣つた。突然彼は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう變るか分らない。さうして其變る所を己は見たのだ」

彼は思はず唇を固く結んで、恰も自尊心を傷けられた人のやうな眼を彼の周囲に向けた。けれども彼の心のうちに何事が起りつゝあるかを丸で知らない車中の乗客は、彼の眼遣に對して少しの注意も拂はなかつた。

彼の頭は彼の乗つてゐる電車のやうに、自分自身の軌道の上を走つて前へ進む丈であつた。彼は二三日前ある友達から聞いたポアンカレの話を思ひ出した。彼の爲に「偶然」の意味を説明して呉れた其友達は彼に向つて斯う云つた。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だといふ、所謂偶然の出来事といふのは、ポアンカレの說によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸見當が付かない時に云

ふのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精蟲の配合が必要で、其必要な配合が出来得るためには、又何んな條件が必要であつたかと考へて見ると、殆んど想像が付かないだらう」

彼は友達の言葉を、單に與へられた新らしい知識の斷片として聞き流す譯に行かなかつた。彼はそれをびたりと自分の身の上に當て箴めて考へた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするやうに思へた。しかも彼はついで今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覺がなかつた。爲る事はみんな自分の力で爲、言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた。

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。それは自分で行かうと思つたから行つたに違ない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈ではなかつたのに。さうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。そ

れも己おれが貰はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない。然し己おれは未だ嘗かつて彼の女をんなを貰はうとは思つてゐなかつたのに。偶然？ポアンカレの所謂複雑いはゆるの極致？何だか解らない」

彼は電車を降りて考へながら宅うちの方へ歩いて行つた。

### 三

角かどを曲つて細い小路こうちへ這入つた時、津田はわが門前に立つてゐる細君の姿を認めた。其細君は此方こつちを見てゐた。然し津田の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直つた。さうして白い繊ほそい手を額の所へ翳かざす様にあてがつて何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍そばへ寄つて來る迄其態度を改めなかつた。

「おい何を見てゐるんだ」

細君は津田の聲を聞くと左さも驚ろいた様に急に此方こつち

を振り向いた。

「あゝ吃驚びっくりした。——御歸り遊ばせ」

同時に細君は自分の有もつてゐるあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫をつとの上に注そぎ掛けた。それから心持腰を曲かめて軽い會釋をした。

半なかば細君の嬌態に應じやうとした津田は半なかば逡巡しゆんじゆんして立ち留まつた。

「そんな所に立つて何をしてゐるんだ」

「待つてたのよ。御歸りを」

「だつて何か一生懸命に見てゐたぢやないか」

「えゝ。あれ雀よ。雀が御向ふの宅うちの二階の庇ひさしに巢を食つてゐるんでせう」

津田は一寸向ふの宅うちの屋根を見上げた。然し其所には雀らしいものゝ影も見えなかつた。細君はすぐ手を夫をつとの前に出した。

「何だい」

「洋杖」  
ステッキ

津田は始めて氣が付いた様に自分の持つてゐる洋杖  
ステッキを細君に渡した。それを受取つた彼女は又自分で玄關  
の格子戸を開けて夫を先へ入れた。それから自分も夫  
の後に跟着いて沓脱から上つた。

夫に着物を脱ぎ換へさせた彼女は津田が火鉢の前に  
坐るか坐らないうちに、また勝手の方から石鹼入を手  
拭に包んで持つて出た。

「一寸今のうち、風呂浴びて入らつしやい。また其  
所へ坐り込むと億劫になるから」

津田は仕方なしに手を出して手拭を受取つた。然し  
すぐ立たうとはしなかつた。

「湯は今日は已めにしようかしら」

「何故。——薩張りするから行つて入らつしやいよ。」

歸るとすぐ御飯にして上げますから」

津田は仕方なしに又立ち上つた。室を出る時、彼は

一寸細君の方を振り返つた。

「今日歸りに小林さんへ寄つて診て貰つて来たよ」

「さう。さうして何うなの、診察の結果は。大方も  
う癒つてるんでせう」

「所が癒らない。愈厄介な事になつちまつた」

津田は斯う云つたなり、後を聞きたがる細君の質問  
を聞き捨てにして表へ出た。

同じ話題が再び夫婦の間に戻つて来たのは晩食が済  
んで津田がまだ自分の室へ引き取らない宵の口であつ  
た。

「厭ね、切るなんて、怖くつて。今迄の様にそつとし  
て置いたつて宜かないの」

「矢張醫者の方から云ふと此儘ぢや危険なんだらう  
ね」

「だけど厭だわ、貴方。もし切り損ないでもすると」

細君は濃い恰好の好い眉を心持寄せて夫を見た。津

田は取り合えずに笑つてゐた。すると細君が突然氣が付いたやうに訊いた。

「もし手術をするとすれば、又日曜でなくつちや不可いけないでせう」

細君には此次の日曜に夫と共に親類から誘はれて芝居見物に行く約束があつた。

「まだ席を取つてないんだから構やしないさ、斷わつたつて」

「でも夫そりや悪いわ、貴方\*せつかく。切角親切にあゝ云つて呉れるものを斷ことわつちや」

「悪かないよ。相當の事情があつて斷わるんなら」

「でもあたし行きたいんですもの」

「御前は行きたければ御出おいでな」

「だから貴方も入らつしやいな、ね。御厭？」

津田は細君の顔を見て苦笑を洩らした。

#### 四

細君は色の白い女であつた。その所爲せむで形の好い彼女の眉が一際引立つて見えた。彼女はまた癖のやうに能く其眉を動かした。惜しい事に彼女の眼は細過ぎた。御負おまけに愛嬌のない一重ひとへまぶち瞼であつた。けれども其一重ひとへまぶち瞼の中に輝やく瞳子ひとみは漆黒であつた。だから非常に能く働らいた。或時は專横と云つてもいゝ位に表情を恣ほしいまゝにした。津田は我知らず此ち小さい眼から出る光に牽き付けられる事があつた。さうして又突然何の原因もなしに其光から跳ね返される事もないではなかつた。彼が不圖ふと眼を上げて細君を見た時、彼は刹那的に彼女の眼に宿る一種の怪しい力を感じた。それは今迄彼女の口にしつゝあつた甘い言葉とは全く釣り合はない妙な輝やきであつた。相手の言葉に對して返事をしやうとした彼の心の作用が此眼付の爲に一寸遮斷しやたんされた。

すると彼女はすぐ美しく歯を出して微笑した。同時に眼の表情が迹方もなく消えた。

「嘘よ。あたし芝居なんか行かなくつても可いのよ。今のはたゞ甘つたれたのよ」。

黙つた津田は猶しばらく細君から眼を放さなかつた。

「何だつてそんな六づかしい顔をして、あたしを御覽になるの。——芝居はもう已めるから、此次の日曜に小林さんに行つて手術を受けて入らつしやい。それで好いでせう。岡本へは二三日中に端書を出すか、でなければ私が一寸行つて断わつて來ますから」

「御前は行つても可いんだよ。折角誘つて呉れたもんだから」

「いえ私も止しにするわ。芝居よりも貴方の健康の方が大事ですもの」

津田は自分の受けべき手術に就いて猶詳しい話を細君にしなければならなかつた。

「手術つてたつて、さう腫物の膿を出すやうに簡単にや行かないんだよ。最初下劑を掛けて先づ腸を綺麗に掃除して置いて、それから愈切開すると、出血の危険があるかも知れないといふので、創口へガーゼを詰めた儘、五六日の間は凝として寐てゐるんださうだから。だから假令此次の日曜に行くとした所で、何うせ日曜一日ぢや濟まないんだ。其代り日曜が延びて月曜にならうとも火曜にならうとも大した違にやならないし、又日曜を繰り上げて明日にした所で、明後日にした所で、矢張同じ事なんだ。其所へ行くとまあ樂な病氣だね」

「あんまり樂でもないわ貴方、一週間も寐たぎりで動く事が出來なくつちや」

細君は又びく／＼と眉を動かして見せた。津田はそれに全く無頓着であると云つた風に、何か考へながら、二人の間に置かれた長火鉢の縁に右の肘を靠たせて、



其中に掛けてある鐵瓶の蓋を眺めた。朱銅の蓋の下では湯の沸る音が高くした。

「ぢや何うしても御勤めを一週間ばかり休まなくつちやならないわね」

「だから吉川さんに會つて譯を話して見た上で、日取を極めやうかと思つてゐる所だ。黙つて休んでも構はないやうなものゝ左うも行かないから」

「そりや貴方御話しになる方が可いわ。平生からあんなに御世話になつてゐるんですもの」

「吉川さんに話したら明日からすぐ入院しろつて云ふかも知れない」

入院といふ言葉を聞いた細君は急に細い眼を廣げりやうにした。

「入院？ 入院なさるんぢやないでせう」

「まあ入院さ」

「だつて小林さんは病院ぢやないつて何時か仰やつ

たぢやないの。みんな外來の患者ばかりだつて」

「病院といふ程の病院ぢやないが、診察所の二階が空いてるもんだから、其所へ入る事も出来るやうになつてるんだ」

「綺麗？」

津田は苦笑した。

「自宅よりは少しあ綺麗かも知れない」  
今度は細君が苦笑した。

## 五

寐る前の一時間か二時間を机に向つて過ぐす習慣になつてゐた津田はやがて立ち上つた。細君は今迄通りの樂な姿勢で火鉢に倚りかゝつた儘夫を見上げた。

「又御勉強？」

細君は時々立ち上がる夫に向つて斯う云つた。彼女が斯ういふ時には、何時でも其語調のうちに或物足ら